

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

クリスマス おめでとうございます！

早いもので、もう1年が終わろうとしています。今年も、皆さまの祈り、励まし、ご支援、ご協力によって、どんなに被災者の方々が安心され、生きる勇気を取り戻されたことか、と感謝の気持ちでいっぱいです。ほんとうにありがとうございます。

本号は、仙台教区サポートセンターの事務局長である小野寺洋一神父からの、皆さまへのご挨拶と同スタッフが被災地の現状を再確認し、災害への備えと過信しないことの大切さを痛感したことを、ご紹介させていただきました。新しい年も、よい年でありますように！

クリスマスおめでとうございます

仙台教区サポートセンター 事務局長 小野寺 洋一神父

皆さま、クリスマスおめでとうございます。慌ただしい年の瀬ですが、クリスマスのひと時に、この一年を振り返ってみましょう。今年には自然災害が大変多い年でした。現地の様子を報道で知り、東日本大震災の記憶と重ねて心を痛めた方も多かったことでしょう。

クリスマスのプレゼントに、ある詩の一節を紹介したいと思います。この詩の原文は、アメリカの詩人サム・レヴェンソンが孫娘の誕生に送った手紙で、詩集「時の試練を経た人生の知恵」に収録されていたものです。女優オードリー・ヘプバーンがとても好きだった詩で、彼女が亡くなる年の最後のクリスマス・イヴに、二人の息子たちに読み聞かせたそうです。

「時を超えた美しさの秘密」より

物は壊れば復元できませんが、人は転べば立ち上がり、失敗すればやり直し、挫折すれば再起し、間違えれば矯正し、何度でも再出発することができます。誰も決して見捨ててはいけません。

人生に迷い、助けて欲しいとき、いつもあなたの手のちょっと先に助けてくれる手がさしのべられていることを、忘れないでください。年をとると、人は自分にふたつの手があることに気づきます。ひとつの手は、自分自身を助けるため、もうひとつの手は他者を助けるために。

息子たちがどのようにこの詩を受け止めたかは分かりませんが、オードリー・ヘプバーンが母として伝えた、この形のないプレゼントは、彼女の死後も息子たちの心を励ましたことでしょう。

災害だけでなく、家庭や仕事のこと、病気など、誰も辛さや痛みを抱えていると思います。そんな一人一人でも、集い、関わり合うことで、立ち上がる力をつけることができる。弱っていた自分がいつの間にか、自分自身だけでなく誰かのために手をさしのべることができるようになる。特に震災後の支援活動の現場では、こんなシーンに出会った方がきっと多いのではないのでしょうか。

東日本大震災から8度目のクリスマスです。支援する、されるという関係性を越えて、お互いを大切に思いあう温かな集いの場所で、喜びに満ちあふれた時を過ごすことができますようにと祈っております。



石巻ベース クリスマス飾り

被災地の現状と震災遺構

仙台教区サポートセンター 鈴木 玉恵

東日本大震災から7年8カ月が過ぎ、仙台市中心部では、本当に震災が起こったのかと思うほど日常を取り戻していますが、津波によって大きな被害を受けた地域は今どようになっているのだろうと思ひ、2018年11月16日(金)、仙台教区サポートセンタースタッフ3人で、仙台近郊の津波被災地を訪れました。

はじめに訪れたのは、津波による甚大な被害を受けた仙台市沿岸部の若林区荒浜地区です。ここは、震災直後、仙台市社会福祉協議会を通じて、仙台教区サポートセンターからボランティアを派遣していた場所でした。震災後、この地区は災害危険区域に指定され、人が住むことのできない地域となり、約95%の土地が既に仙台市に買い取られています。今後の活用方法が課題となっています。

荒浜小学校からの景色

(写真上) 海側 (写真下) 内陸側



海側には、津波に耐え残った木やかさ上げされた防潮堤、最近整備された公園や太陽光パネルが見られ、内陸側では、津波を抑える堤防機能をもつ高さ約6メートルの盛り土構造の東部復興道路の工事が行われていますが、建物などはほぼなく、雑草だけが生い茂り、人けを感じない寂しい場所に思えました。

この荒浜地区には、震災遺構「仙台市立荒浜小学校」があります。荒浜小学校は、海から約700mのところの位置し、震災時、津波が校舎2階まで押し寄せましたが、校舎内に避難していた児童や教職員、地域住民ら320人は、無事でした。一方、地域住民2,200人のうち、途中下校した荒浜小学校の児童1人を含む190人余りの方が亡くなり、荒浜地区で残った建物は荒浜小学校の校舎だけでした。



震災前の荒浜地区のジオラマ ↑唯一残った荒浜小学校(赤丸内)

さらに命を守るためにはどうしたらよいかという工夫がなされていました。



校舎1階の様子

海側（校舎東側）の教室には、車などたくさんの瓦礫が押し寄せた。



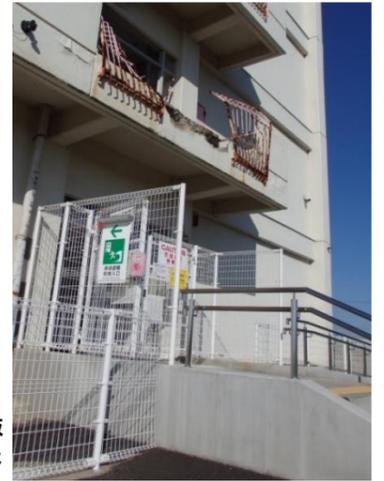
校舎2階まで到達した津波

写真左：校舎外側の津波到着地点表示
 写真右上：2階の壁には浸水の跡
 写真右下：天井には津波しぶきの跡
 ※赤枠および赤矢印部分



↑校舎内にある避難表示

現在いる場所の階数も書かれている
 表示右の丸い場所は、耐震診断を行った跡
校舎入口にも避難場所の表示→
 鍵がかかっている時間帯も、プラスチック板を壊して鍵を開ければ校舎内に避難できるようになっていた



②過信しない

当時の荒浜小学校教頭のインタビューで、学校へと避難してきた地域住民への対応担当となり、校庭に出て、車や徒歩で避難してきた住民に対し、大声で、「校舎に入り、各地区ごとに割り当てられた教室へ移動してください」と再三訴えたにもかかわらず、誰一人、自分の言うことを聞いてくれる人がいなかったという言葉がありました。皆、車に乗ったままであったり、校庭で知っている人たち同士で立ち話をしていたというのです。

また、町内会長が、避難を呼びかけたが、避難してもまたどうせ戻ってくるなら…と避難せずに家に留まった人や一度避難したが家に戻った人などがいて、犠牲となってしまった…と話されていました。

震災前、この地域に押し寄せる津波の高さは1～2メートルと予測されており、6.2mの防潮堤もあったことから、これほどまでの被害をもたらす津波が来るとは思っていなかった人がいて、被害が出てしまったのだと思います。東日本大震災で被害が大きかった地域では、同じようなことが起こっていたとよく耳にします。いつどんな災害が起こるかは予測不可能ですが、どうしたら少しでも命を守ることができるのか考え、実際に災害が起きた際には、過信せずにはまず逃げるのがとても重要であると思いました。

次に、荒浜小学校から車で10分ほどの名取市^{ゆりあげ}閑上地区を訪れました。こちらは荒浜地区とは異なり、人の住めない地域に指定する形ではなく、津波被害のあった土地をかさ上げし、土地区画整理事業による自宅再建や復興住宅（集合型および戸建て）建設により、住民の皆さんに住んでいただくという復興形態をとっています。

閑上地区では、やっと街が少しずつできてきた印象を受けましたが、人の姿や商店などは見られず、日常生活を取り戻すには、まだまだ時間がかかるのだらうと思います。

また、閑上地区で流されず残っていた水産加工会社の工場は、民間施設ということもあり、震災遺構の指定が見送られ、つい1週間前から解体作業が始まっていました。私たちが足を運んだこの日には、建物は何もなく、基礎部分のみがわずかに残っていました。

閑上地区 日和山からの景色

閑上港周辺 震災メモリアル公園になる予定



緑枠の場所に以前建っていた水産加工工場→

このように被災地では、津波の痕跡が残る場所や建物が減り、津波が押し寄せ、大きな被害があったことを知る機会が減っているように感じます。日常を取り戻すために必要なことではありますが、震災の記憶が薄れてしまうということへの懸念もあります。

①災害への備えの大切さ

この荒浜小学校では、避難場所を校舎に指定していました。町内会長のインタビューで、「体育館に避難していたら助からなかった」という言葉がありましたが、実際、体育館は津波に襲われ、がれきが散乱した状態となりました。



津波襲来時刻15時55分で止まった体育館の時計



実は、この荒浜小学校では、東日本大震災1年前の2010年チリ地震津波の経験を生かし、避難場所を体育館から校舎へと変更し、備蓄品なども体育館から校舎3階に移動させていたそうです。2010年チリ地震津波の際には、直接的な被害がこの学校にはなかったかと思いますが、万が一のために避難計画を変更し、それが東日本大震災時に多くの命を救う結果になったのです。

そして、今現在もこの荒浜小学校は避難場所に指定されています。避難場所は校舎内から、さらに上の「屋上」へと変更され、校舎周辺や校舎内には避難場所の表示があり、東日本大震災の経験をふまえ、

今回、震災遺構や津波の被害を受けた地域の現状を見て、震災遺構が存在する意義を改めて感じました。震災前は多くの方が住み、日常生活が繰り広げられていた場所であったこと、震災によってそこに住んでいた人々の日常や命が一瞬にして奪われたことなど、震災のことを改めて考えるきっかけを震災遺構が与えてくれたように思います。

震災から7年以上が経ち、復興が進んでいる、もう支援は必要ないのではないかと思う方がいるかもしれませんが、実際は、まだまだ復興途上であったり、厳しい環境で生活されている方がおります。今回、津波が襲来する映像を久しぶりに見て、震災当時のことが思い出されると同時に、このような津波を目の当たりにし、自分の家や生活を一瞬にして奪われた人々の心の傷は、一見、普通の生活を取り戻しているように見えても、なかなか癒されないだろうと思いました。そして、防災・減災に対する取り組みの大切さ、東日本大震災の経験を無駄にしてはいけないという思いが強くなりました。

被災地に足を運んだり、今の被災地の現状を知ることは、「被災地を忘れない」ということだけではなく、今後起こりうる震災について、事前にどのように行動したらよいか、行動できるかなどを考えるきっかけになるかと思えます。ぜひ、機会がありましたら、震災遺構をはじめ、今の被災地を訪れてみてください。



かさ上げされ復興住宅などが建ち始めた関上地区



今年4月に開校した関上小中学校
周辺では工事がまだ行われている



震災前後の関上地区の航空写真
住民の5人に1人が犠牲となり、ほとんどが更地となった

《年末年始休業のお知らせ》

仙台教区サポートセンターおよびカリタス石巻ベースでは、以下の通り、年末年始のお休みをいただきます。

ご不便をおかけいたしますが、何卒よろしくお願いたします。

なお、休業期間中にFAXやメールにてお申し込みいただきました復興支援タオルのご注文につきましては、1月4日(金)以降、順次返信させていただきます。

どうぞよろしくお願いたします。

[休業期間(仙台教区サポートセンター)]

2018年12月28日(金)～2019年1月3日(木)

[休業期間およびボランティア受け入れ停止期間

(カリタス石巻ベース)]

2018年12月23日(日)～2019年1月6日(日)

主のご降誕のお喜びを申し上げます

この1年も、たくさんのご支援・ご協力のおかげで、無事に活動を続けることができました。お世話になりました皆さまに、心より感謝申し上げます。

東日本大震災から7年9カ月が経ち、岩手・宮城・福島3県では、帰還者向け災害公営住宅(福島県)を除き、災害・復興公営住宅の完成率が95%を超えるまでに進んでいます。しかし、公営住宅入居や自宅再建をはたしても、コミュニティ形成や今後の生活についての不安や問題など、目には見えない問題を抱え、支援を必要とされている方がいます。

また、今なお、岩手県約4,400人、宮城県約5,400人、福島県約43,200人という数の人々が、県内・県外で避難生活を送っており、いまだ定住地が決まっていないのです。

仙台教区サポートセンターでは、できることはささやかですが、これからも被災地で暮らす方々、支援を必要としている人々と「ともに生きる」ことを大切に、歩んでいきたいと思っております。

最後に、東日本大震災後、日本では大きな自然災害が毎年のように起こっています。今年も、7月の西日本豪雨災害、9月の北海道胆振東部地震をはじめ、立て続けに災害が起こり、被害の様子に心を痛めることが多々ありました。改めて、被災された方々にお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興をお祈りいたします。

新しい年も、皆さまの上に、神様の豊かな祝福が注がれますようにお祈りしております。

仙台教区サポートセンター 一同



利用者さんと一緒につくったクリスマスツリー



成年から亥年へ

※写真提供：カリタス石巻ベース